

# くらしの中で読む『正法眼蔵』

## ——面授の巻—— その一

成興寺住職 小倉玄照

「面授」というのは、師と弟子とがまのあたりに対峙してぴったり一枚の境地になることを言います。「面授」はもちろん師の側からの表現です。弟子の側から表現すれば、「面受」になります。「面稟」とも言います。

師が面授し、弟子が面受し面稟すれば、師のいのちが弟子にそっくりそのまま伝わることになりませんが、宗門ではそれを「嗣法」と言います。或いは「伝法」とも言います。

『正法眼蔵』 嗣書の巻には、

「佛佛に嗣法し、祖祖かならず祖祖に嗣法する、これ証契なり、これ単伝なり、このゆるぎに無上菩提なり、佛にあらざれば佛を印証することあたはず、佛の印証をえざれば佛となることなし」

と断定されています。佛のいのちを相続することは、佛弟子にとつては一大事だということがこの一節からも承知できるとでしょう。

道元禪師は、中国へ渡り、天童山の如浄禪師の下で修行生活をされたのですが、帰国に際し

て、如浄禪師から、

「一箇半箇を接得して吾宗をして断絶致さしむることなかれ」(『建誓記』)

という厳命を受けられました。もつともこのことばの前段には世俗のことに関わることなく、「深山幽谷に居して」ということが示されて、いるのですが、これはあくまで方法論ですから、居すべき深山幽谷が消えてしまっても「吾が宗をして断絶致せしむることなかれ」という遺訓は生き続けると考えてよいでしょう。実際、道元禪師は、ほとけのいのちの相続ということの重大性を生涯かけて説けつづけられたのです。

これから参究する「面授」もそういう巻の一つです。示衆されたのは、寛元元年(一一四二)十月二十日。都から越前の山中に居して「我が宗をして断絶致さしむることなかれ」という遺訓を胸に暖めながらの示衆であったと考えてよいでしょう。

なぜ、嗣法ということが、或いは面授面禀と  
いうことが一大事となるのでしょうか。それにつ  
いては、本文を拝読して行く間に明らかにな  
るはずですが。早速に本文を拝読いたしましょう。

### 正伝と面授

「その時、釈迦牟尼仏、西天竺国靈山会上百  
万の衆中に、優曇華を拈じて瞬目す。時に摩訶  
迦葉尊者、破顔微笑す。釈迦牟尼仏言はく、吾  
に正法眼蔵涅槃妙心あり、摩訶迦葉に付属す、」  
これすなはち、仏仏祖祖、面授正法眼蔵の道  
理なり。七仏の正伝して迦葉尊者にいたる。迦  
葉尊者より二十八授して菩提達磨尊者にいた  
る。菩提達磨尊者、みづから震旦国に隆儀して、  
正宗太祖普覚大師慧可尊者に面授す。五伝して  
曹谿山大鑑慧能大師にいたる。一十七授して先  
師大宋国慶元府太白名山天童古仏にいたる。

大宋宝慶元年乙酉五月一日、道元はじめて先師天童古仏を妙香台に焼香礼拝す。先師古仏はじめて道元をみる。そのとき、道元に指授面授するにいはく、仏仏祖祖面授の法門現成せり。これすなはち靈山の拈華なり。嵩山の得髓なり。黄梅の伝衣なり、洞山の面授なり。これは仏祖の眼蔵面授なり。吾屋履のみあり、余人は夢也未見聞在なり。

〈現代語私訳〉

「そのとき、釈迦牟尼仏は、はるかな西の国インドの靈鷲山の道場に在して、百万の修行者たちを前に、優曇華の一枝を手にしてまばたきをされた。すかさず摩訶迦葉尊者は相好をくずしてほえまれた。釈迦牟尼仏は、〈わたしのいのちの本質（ほとけのいのち）は、今そっくりそのまま摩訶迦葉に伝えられた〉と仰せになった。」

これがつまるところ、仏から仏へ、或いは祖

師から祖師へと、ほとけのいのちが親しく伝えられて来た消息である。無限の過去から七代の仏（釈迦牟尼仏を七代目とする）によって正しく伝えられて迦葉尊者にいたつたのである。迦葉尊者から二十八代を正伝して菩提達摩尊者にいたつたのである。菩提達摩尊者は、みずから中国に渡つて来られて、正宗太祖普覚大師に面授した。その後、五代を経て曹谿山大鑑慧能大師にいたつた。それから十七代の面授を経て、先師である大宋国は慶元府の太白名山天童山の古仏如浄禅師にいたつたのである。

あれは忘れもしない大宋宝慶元年乙酉五月一日のことであつた。わたくし道元は、天童山の方丈の間である妙高台で、先師である如浄古仏に焼香し、礼拝をした。先師の如浄古仏は、はじめてわたくし道元をみたのである。そのとき、道元を指さし、親しく顔を見つめながら、〈仏から仏へ、祖師から祖師へと面授されて来たほ

とけのいのちは、そっくり汝に伝えられたと仰せになった。これはそのまま靈鷲山における拈華そのままである。嵩山の得髓であると言ってもよい。或いは、黄梅の伝衣であり、洞山の面授でもある。つまるところ仏祖が、ほとけのいのちを親しく面授することである。これは、わたしどもの宗門にのみ伝わっていることであって、門外の人は、夢にも見聞したことはあるまい。

### いのちを伝える

この十年ばかり、私は保育園の運営に専ら力を注いで来ました。ところが、そんなことは禅門の修行者としては本筋のものではあるまいという人が相当にいます。

しかし私は、家族を放擲して六年間も永平寺で修行生活をさせてもらった罪ほろぼしのため



に、保育を天職のようにして日夜それに献身する家内を援助して保育の仕事に関わっている間に大変なことに気づきました。かつての貧しい農耕社会に於ては、誰もが親として自然に湧きいずる我が子を愛しむ情感のままに子どもと関わっていたれば、子どもは大概順調に育って行きました。

ところが、工業社会になって状況はすっかり変わって来たのです。豊かで、便利な世の中が出現したために、意外なことに子どもを育てることがとてつもなくむずかしいことになってしまったらしいのです。

工業社会の子育てが危機的な状況にあることは、私ども人間の未来にとってきわめて危険な兆候だと私は受けとめています。しかし、出家は本来そのようなことに関わる必要はない、文明が崩壊しようと、人類が滅亡しようと一向に頓着することなく、只管に仏祖の古規に従って

修行生活を続けていけばよいのだ、という意見には根強いものがあるのです。

私が縁あつて三年間預かつた弟子も、その考え方から一步も抜けきれませんでした。坐禅や読経には、目の色を換えて熱中するのですが、保育のことになる、命ぜられたことをあたかも片づけ仕事のように何の感動もなく処理するだけでした。きっと、

「俺は、こんなことをするために出家したのではない」

という潜在意識をじつと封じ込めて、師匠の私に不承不承従っていただけなのでしょう。

私のところへ押しかけて来たとき、山ほど抱えていた精神安定剤らしき薬を私はすべて没収しました。最初の内、彼は陰鬱な顔つきでした。彼が居ると、周辺の人たちはみな、何だか重苦しい雰囲気になりました。

しかし、畑を耕し、野菜を中心とした保育所

の給食を食べ、子どもと遊ぶ生活を続けている間に、彼は徐々に健康を回復しました。結核は要観察者でしたが、二年目の夏、無罪放免のお墨付を保健所から貰いました。近所の人たちも驚くほどに明るい顔つきにもなりました。ところが、何とか自立して生活できるのではないか、という自信のようなものが彼の内部に生じたとき、保育を中心に営む日常の生活を不満とする潜在意識が肥大してしまつたようです。ほぼ満三年を迎えた木の芽どきに、発作的に私の眼前から消えて行きました。彼は、保育と坐禪が深いところで連なつていることがどうしても臍はらおち出来なかつたのです。

仏道修行は、個人的な苦悩を克服するためになされるものではありません。そのところが多くの人に誤解されていると思います。

動物行動学では、いのちの本質を遺伝子という概念で捉えた上で、いふなれば「遺伝子」の

容器といつてもよいような「肉体」は、崩壊し易いので、肉体が元気な間に遺伝子は、自らのコピーを作つてその永続性を保とうとするのだ、と考えるようです。(リチャード・ドーキンス『利己的な遺伝子』紀伊国屋書店)

これは、仏道における「単伝」とか「嗣法」という思想を自然科学の手法で展開した理論のように私には思えます。いのちの本質を「利己的な遺伝子」と捉えるドーキンスの考え方は、仏法となじまぬではないかという意見は当然生じるでしょう。しかし、禪門では「煩惱即菩提」を説くのですから「利己的な遺伝子」の発想も、その延長線上にあると私は読みとつています。そのことについては、機会があればまた論じてみたいと思います。

ともあれ、無常の世を無常の身心が、わがいのちの永遠の存続を願うという煩惱を肯定しつつ生きる―これが仏道修行の根っこにある大命

題なのです。これをもし否定したならば、仏道の修行は意味をなさなくなってしまうのです。

道元禪師は、出家の功德を力説されました。しかし、これは出家することによって個人的な煩惱を捨て、安樂の境涯に至ろうとめざすものではありません。

「三世の諸仏の所証なる阿耨多羅三藐三菩提、金剛不壞の仏果を証する」(出家功德)ためにこそ出家するのです。つまり、永遠の過去仏から相続した、阿耨多羅三藐三菩提(いわく言いがたき「ほとけのいのち」)を相承し、それを未来永劫に伝えるためです。

だからこそ

「若無過去世、応無過去仏。若無過去世、無出家受具。」(もし過去世無からんには、まさに過去仏なかるべし。もし過去仏無からんには、出家受具なけん)。

という諸仏如来の偈の重要性を『出家功德』

の巻では力説されるのです。過去世も来世もないのだ、存在するのは今だけだ—という考え方は、仏教の無常觀を肯定してはいてもその修行生活は仏道のそれとは言えなくなる、と仰せになるのです。「この偈は、外道の過去世なしといふを破するなり」(同書)。

だから、出家は「面授」によって師匠からほとけのいのちを相続したならば、必ずそれを自分の弟子に伝えなければなりません。

宗門には在家得度ということもあります。これは、家庭を維持して、「人間のいのち」を単独して行くことの重要性を道元禪師が認識しておられたからにほかなりません。在家のままの得度は、「ほとけのいのち」を師から面授することは不可能であり、ましてやそれを弟子に面授する資格も義務もないのです。(在家者はなぜ「ほとけのいのち」を面受出来ないのかという点については、また後ほどふれたいと思います。)そ

ういう意味では、在家得度は受けただけれど、終生独身のままで出家の縁もなかったという人かもしれない、よき師から得度したとしても、自ら面受面授することはあり得ないことになりま

すから、仏縁は薄いと申してよいでしょう。

近年の出家は、寺に生まれ、寺に育ち、肉の親から面受するのが普通です。「人間のいのち」を相続すると同時に、「ほとけのいのち」も単伝して行くわけです。道元禪師の時代の純粹出家の面授面受到に比較すると、それは墮落だという人があるかもしれませんが、しかし、私は、時代の流れの中でそういう状況が出現しているのですから、あながちにそうとも思いません。

仏弟子として墮落を責められねばならないのは、わが弟子に面授嗣法しないことです。それほどに道元禪師の法孫にとって面授は重大な問題と言えます。

私は、二人の子を育てています。(人間のいのち

ちの相続)。長男には、何とか面授して法(ほとけのいのち)を嗣がねばならぬと念じています。出家と在家の両面を備えた私のような立場で「在寺」と名づけているのですが、在寺の立場で「面授」の巻を拝読いたしますと、在家の人の「人間のいのち」の相続、つまり、「子育て」にとっても示唆を受けることが多いのに感じします。

今、日本の子育ては、すでに述べましたように全体的に危機的状况にあります。在家の子育てがきちんとなされていないことは、出家の土壤が疲弊していくことにつながります。私が保育に専念するのも一にそのこととかわかっているのです。

著者紹介 小倉玄照(おぐら げんしょう)

一九三七年 岡山県に生まれる。一九六〇年 駒沢大学仏教学部禅学科卒業。一九七三年 曹洞宗大本山永平寺講師。現在 岡山県苫田郡加茂町 成興寺住職